

「異質なものを結びつける」

本来、結びあわないものが、文章の中で巧みに結ばれたとき、私たち読者はそこに驚きを感じるとともに、好奇心を刺激されます。今回は、異質のものを結びつけることの面白さについて、事例をもとに辰濃先生に紹介していただきました

何年前か前、朝日新聞文化欄に載ったエッセーをときどき思い出す。憲法学者、田村さんの書いた「キムタクの『目』と憲法」という題の作品だ。キムタクと憲法？ いったいどう結び付くのか？ と好奇心を刺激されて読んだ覚えがある。

田村さんはテレビドラマ『HERO』の中の、キムタクの扮する久利生検事の発言を取り上げる。キムタク検事は、一市民にあらぬ容疑をかけ死に追いやった横暴な刑事に対して、怒りをこめてこういう。

「俺達みたいな仕事ってな、人の命を奪おうと思ったら簡単に奪えんだよ。あんたら警察も、俺ら検察も、そしてマスコミも、これっぽっちの保身の気持ちでな、ちよっと気を緩めただけで人を簡単に殺せんだよ。俺らはそういうことを忘れちゃいけないんじゃないすか！」

その通りだと思ふ。最近の、厚労省のからむ郵便不正事件では、検事による「証拠改ざん」があり、それを上司が隠そうとした疑いが出てきた。この改ざんによって厚労省局長の女性も、最悪の場合、役人としての生命を奪われたかもしれない。

しかしながら、私がここで、田村さんのエッセーを持ち出したのは検察の失態を糾弾するためではなく（むしろ、糾弾したい気持ちはあるのだが）、この場では、あくまでも文章論を意図していることはいうまでもない。文章論？ そう、この欄は文章を論ずるためにいただいた貴重な誌面なのだ。そしていいたい。私が今も「キムタクと憲法論」のことを思い出すのは、この文章が、憲法論というお硬い主題にキムタクという異質のものを結びつけたおかげで光を放ち、記憶に留まつたということである。

「二憲法学者の憲法論」では、人は進んで読んでくれない。だがキムタクの名前で登場することで「おもしろそうだ」と思ってくれる人がでてくる。一種の遊びだが、私はそういう手法を邪道とは思わない。

異質なものを結びつけることのおもしろさを教えてくれた先人に、芭蕉がいる。芭蕉の天才は、天地をゆるがす「蟬の声」とは相いれないと思える「閑さや」という言葉をもつてきて結びつけている。「閑さや岩にしみ入蟬の聲」。蟬の声は

本来、静寂とは無縁だ。その異質のものを結びつけることで、森の音風景はやかましさを静寂へと一変する。異種結合のおもしろさだ。

異種結合のおもしろさを思う存分に発揮してくれたのが、歌人の俵万智さんだろう。たとえば「恋の告白」と「カンチューハイ」はあまりお似合いの言葉ではないけれど、俵さんは二つの異質な言葉を結びつけて成功している。「嫁さんになれよ」なんてカンチューハイ二本で言ってしまうといいの」。酒の勢いで告白をする男と、それをやや冷静に見ている自立した女性と、そんな恋の風景かにしみでてくる歌だと思ふ。

●たつの・かずお
朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、解説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。

